1　東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年9月)

野菜振興部　調査情報部

【要約】

●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万6401トン、前年同月比96.1%、価格は1キログラム当たり323円、同104.7%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5976トン、前年同月比93.4%、価格は1キログラム当たり282円、同105.6%となった。
●10月初旬の時点では、秋冬野菜はおおむね平年並みで始まった。猛暑の影響を受けて、10月の生産は少なめとなっているが、11月には平年並みに回復することが見込まれる。

(1) 気象概況

上旬は、北・東・西日本では、前線の影響で局地的に大雨となった所もあったが、高気圧に覆われやすく、晴れた日が多かった。旬平均気温は、全国的に暖かい空気に覆われやすかったため、東・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、北日本で高かった。晴れて強い日射の影響を受けたこともあり、旬後半を中心に猛暑日となった地点が多くなった。旬間日照時間の平年比は、北日本日本海側で147%、西日本日本海側で174%、西日本太平洋側で156%となり、それぞれ1961年の統計開始以降、9月上旬として1位の多照となった。また、北・東日本太平洋側でも旬間日照時間はかなり多く、東日本日本海側で多かった。旬降水量は、北日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なく、北・東日本日本海側と西日本太平洋側で少なかった。

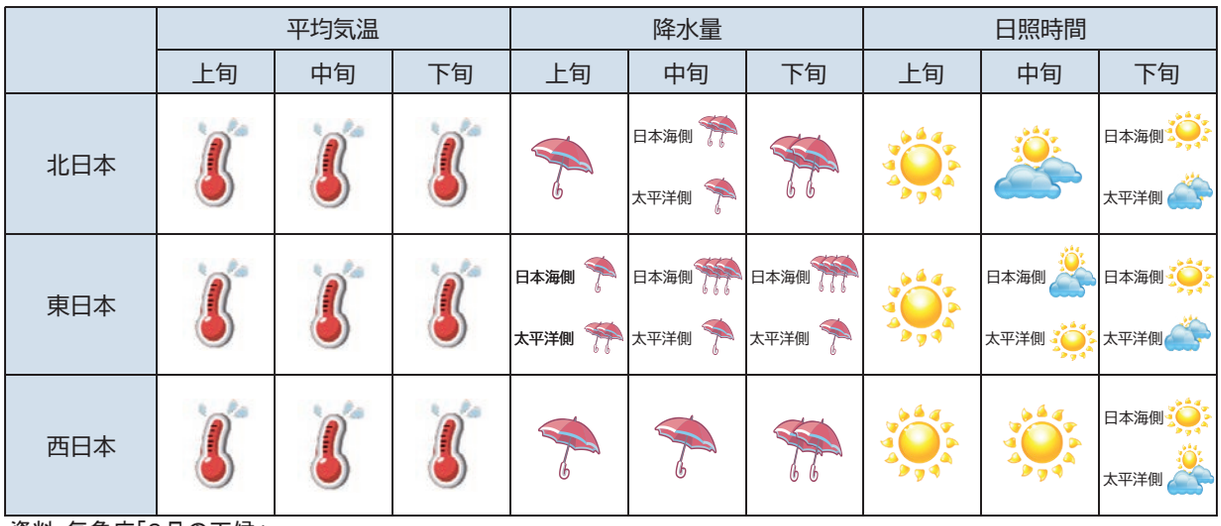
中旬は、全国的に暖かい空気に覆われやすく、旬平均気温は、全国的にかなり高かった。東日本太平洋側と西日本を中心に高気圧に覆われやすく、強い日射の影響もあって、20日は静岡で39.2℃を観測するなど9月の日最高気温の記録を更新した所が多くなった。猛暑日となった地点数も多く、旬平均気温平年差は東日本と西日本のどちらも＋4.9℃となり、それぞれ1946年の統計開始以降、9月中旬として1位の高温となった。旬間日照時間は、東日本太平洋側と西日本でかなり多く、沖縄・奄美では少なかった。旬降水量は西日本日本海側でかなり少なく、北・東・西日本太平洋側で少なかった。20日には秋田県で線状降水帯が発生するなど記録的な大雨となった所もあった。また、沖縄・奄美では台風第13号が接近して大荒れとなった所があったほか、台風第14号や熱帯低気圧の影響もあって曇りや雨の日があったことから、東日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。

下旬は、東日本日本海側を中心に、記録的な大雨となるところがあった。旬平均気温の偏差は、西日本で＋3.2℃となり、1946年の統計開始以降、9月下旬として1位の高温となった。北日本は旬前半に寒気の影響を受けたものの、その後は暖かい空気に覆われて、高かった。東・西日本と沖縄・奄美は暖かい空気に覆われて真夏日となった地点も多く、かなり高かった。旬間日照時間は、旬の半ば以降、北・東・西日本日本海側を中心に移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、北日本日本海側でかなり多く、東・西日本日本海側で多かった。一方、北日本太平洋側は高気圧後面の湿った空気の影響で曇る日もあった。旬後半は秋雨前線が本州南岸に停滞し、また東シナ海付近では台風第16号や熱帯低気圧の影響を受けやすかった。このため、北・東日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。旬降水量は、21日から22日にかけて秋雨前線が日本列島をゆっくり南下して、東日本日本海側を中心に大雨となり、21日には石川県で線状降水帯が発生するなど記録的な大雨となったことから、東日本日本海側で多かった。北・西日本と東日本太

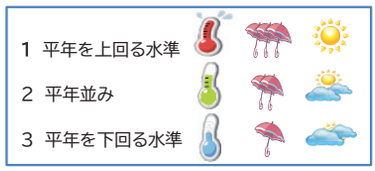
平洋側では、秋雨前線の影響は小さかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図１）。

図１　気象概況



資料：気象庁「９月の天候」



（２）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万6401トン、前年同月比96.1％、価格は１キログラム当たり323円、同104.7％となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	106,401	96.1	89.8	323	104.7	118.7	322	335	314
だいこん	6,974	99.3	81.7	146	96.3	124.8	159	155	130
にんじん	6,456	117.7	95.8	141	62.6	93.7	140	156	129
はくさい	7,433	82.5	79.4	112	121.8	108.8	106	121	109
キャベツ類	15,290	98.1	93.1	96	106.9	100.1	86	92	111
ほうれんそう	564	92.8	73.3	1,051	100.6	122.8	1,080	1,097	980
ねぎ	3,868	109.6	96.1	436	84.3	117.0	407	426	474
レタス類	8,508	93.0	96.2	278	135.6	138.8	280	309	245
きゅうり	6,226	87.0	84.9	443	127.8	134.9	471	413	451
なす	2,673	88.5	89.6	429	109.4	118.0	391	432	471
トマト	4,979	91.6	80.2	638	104.9	134.5	610	655	651
ピーマン	2,297	106.5	94.7	620	106.5	143.6	555	650	662
さといも	578	87.3	83.3	376	109.3	111.4	393	371	369
ばれいしょ	6,147	90.4	91.7	147	109.9	107.4	180	141	116
たまねぎ	9,266	99.0	97.3	117	110.7	116.5	125	117	106

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格は月間を通して大きな動きはなかったものの、大幅な高値で推移した前年を4割近く下回り平年を下回った（図２）。

葉茎菜類は、レタスの価格は前年を3割以上上回り、平年を４割近く上回った（図３）。

果菜類は、きゅうりの価格は堅調に推移し、前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った。（図４）。

土物類は、ばれいしょの価格は棚の拡大が進み、下旬に向けて落ち着きを見せたものの前年を１割近く上回り、平年を上回った。（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

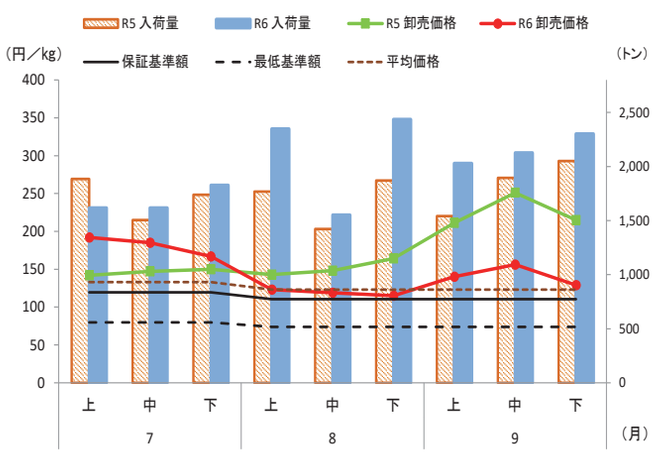


図３　レタスの入荷量と卸売価格の推移

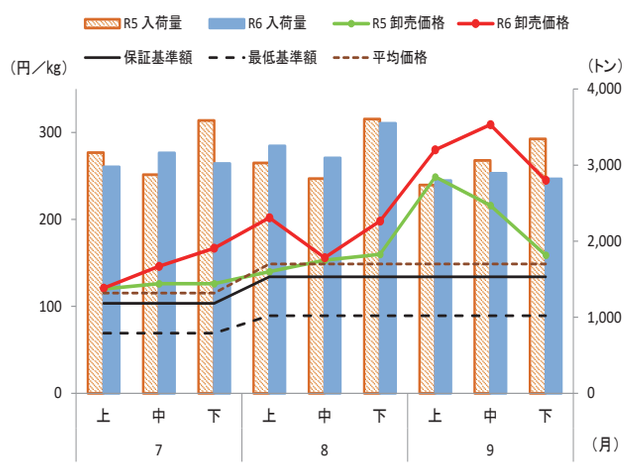


図４　きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

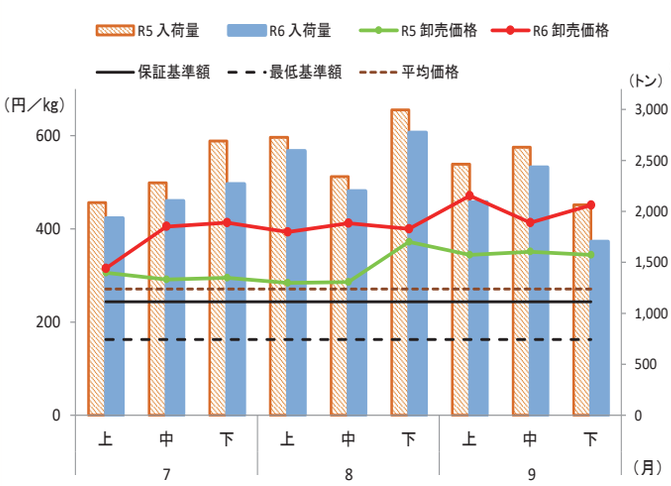
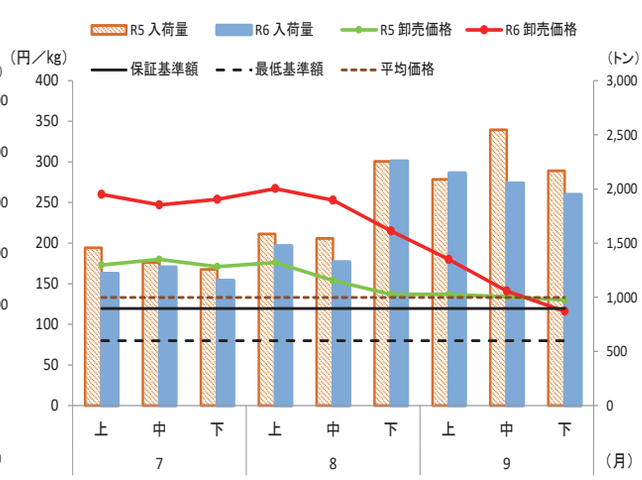


図５　ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※１　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※２　平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※３　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、8月中旬以降、軟腐病（なんぷびょう）や横縞症（よこしましょう）などの病害が出ていたが、9月に入りやや落ち着いた。青森産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は3日程度前進傾向となった。降雨や高温の影響により、軟腐病の発生が散見され、また虫害も見られる。総入荷量は少なかった前をわずかに下回り、平年を2割近く下回った。 価格は特売需要などで堅調な動きではあったが、旬を追うごとに価格が下落し、高かった前年をやや下回り、平年を2割以上上回った。
	にんじん	北海道産が中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、6～7月の高温の影響により、生育はおおむね順調も、一部病害や生理障害が見られた。中国産の輸入は前年の半分以下となった。総入荷量は少なかった前年を2割近く上回り、平年をやや下回った。 価格は月間を通して大きな動きはなかったものの、大幅な高値で推移した前年を4割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
葉茎菜類	はくさい	長野県産が中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月以降の高温多湿傾向により軟腐病が多発し、品質が低下している。総入荷量は少なかった前年を2割近く下回り、平年を2割強下回った。 価格は棚替わりで堅調な動きとなり、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割近く上回った。
	キャベツ類	群馬産が中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、降雨により、干ばつの影響から回復し生育はおおむね順調であった。一部、軟腐病や黒斑細菌病（こくはんさいきんびょう）が散見されるが大きな問題はない。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格はやや安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年並みとなった。
	ほうれんそう	群馬産、栃木産の高冷地中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温障害の影響で生育は良くない。生育遅延や発芽不良に加えて虫害も散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、高温による生育停滞は9月に入り夜温の低下によりやや回復したものの、曇天と降雨の影響で軸が細く棚持ちが懸念される。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を3割近く下回った。 絶対数不足により堅調な価格が続き、高めに推移した前年をわずかに上回り、平年を2割以上上回った。
	ねぎ	北海道産を中心に秋田産、青森産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されるが生育はおおむね順調であった。秋田産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生育停滞からは回復傾向も、軟腐病や腐敗病の多発傾向に加え、葉枯が散見された。青森産の作付面積は前年並みで、高温による生育停滞からは回復も、一部地域で軟腐病、腐敗により圃場（ほじょう）廃棄が生じている。また、山形産などは水害の影響により大幅に前年を下回っている。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年をやや下回った。 価格は絶対数不足や傷みの発生などから堅調な動きとなり、大幅な高値で推移した前年を2割近く下回ったものの、平年を2割近く上回った。
	レタス類	長野産が中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月以降の高温多湿により軟腐病などの病害が多く、品質の低下が見られた。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 価格は前年を3割以上上回り、平年を4割近く上回った。

果菜類	きゅうり	福島産を中心に、群馬産、埼玉産、岩手産などの入荷となった。福島産の作付面積は前年並みで、成り疲れや梅雨明け以降の高温乾燥、短期間での豪雨などの影響があり、果形の乱れや草勢低下が見られた。また病虫害も散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、9月中旬より収穫開始も一部高温による果形の乱れが散見された。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調もコナジラミの発生が多かった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部曇雨天の影響によりべと病、褐斑病が散見されるが、生育はおおむね順調であった。総入荷量は前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は堅調な推移となり、前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った。
	なす	群馬産を中心に栃木産など関東産の露地作の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調もハダニ、コナジラミ、オオタバコガなどの虫害が散見された。一部地域で降雹の被害があったものの、草勢は回復している。栃木産の作付面積は前年並みで、高温干ばつにより草勢が低下している圃場が多く、花数、着果数は少なく、ハダニ、アザミウマなどの虫害が散見された。総入荷量は平年並みであった前年を1割以上下回った。 秋商材で棚が増えたことにより下旬に向けて価格を上げ、やや高めに推移した前年を1割近く上回り、平年を2割近く上回った。
	トマト	北海道産、福島産、千葉産、群馬産が中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。福島産の作付面積は前年並みで、一部圃場で病虫害が散見されたが生育速度は平年並みであった。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつによる着果、着色不良が散見されている。また、黄化葉巻病の発生が見られる。群馬産の作付面積は前年並みで、高温の影響により落花、着果不良が見られる。大雨の影響での裂果も生じており、全体に小玉傾向となった。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は大幅に高値で推移した前年をやや上回り、平年を3割以上上回った。
	ピーマン	岩手産、茨城産中心の入荷となった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場でアブラムシ、アザミウマなどの虫害が散見されるものの、生育はおおむね順調であった。茨城産の作付面積は前年並みで、遅延していた生育は回復し順調であったが、一部高温障害が散見された。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は堅調な動きとなり、大幅な高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を4割以上上回った。
土物類	さといも	千葉産を中心に、後続の埼玉産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育は順調であり、ピークを越え終盤に向かっている。疫病が散見されたものの、平年より病気は少なかった。埼玉産の作付面積は前年並みで、降雨の影響により病害の発生が散見されたが、大きな影響はなかった。中国産の輸入は前年の3.6倍以上となっている。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 棚替わりにより動きが良くなったことに加え、数量が少ないことから価格は堅調な展開となり、前年を1割近く上回り、平年を1割以上上回った。
	ばれいしょ	北海道産が中心の入荷となった。作付面積は前年を上回り、7月の干ばつ傾向から気温の上昇と降雨の影響により順調で、生育はやや前進した。総入荷量は前年を1割ほど下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、棚の拡大が進みんだことにより下旬に向けて落ち着きを見せたものの、前年を1割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。
	たまねぎ	北海道産が中心の入荷となった。作付面積は前年をやや上回り、高温の影響により生育は4～5日程度前進した。サイズはL大、L中心で品質も良好であった。中国産の輸入は前年を5割近く上回っている。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。 価格は下旬に向けて落ち着いたものの、やや高めに推移した前年を1割強上回り、平年を1割以上上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万5976トン、前年同月比93.4％、価格は１キログラム当たり282円、同105.6％となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,976	93.4	90.3	282	105.6	116.9	275	297	276
だいこん	2,306	94.2	73.1	143	98.6	125.1	139	152	139
にんじん	2,613	100.9	96.4	136	60.9	91.8	140	154	112
はくさい	3,587	89.3	84.6	109	121.6	108.9	107	120	100
キャベツ類	5,809	93.7	94.9	90	110.7	98.2	81	87	104
ほうれんそう	229	86.3	72.6	1,095	109.7	118.6	996	1,159	1,124
ねぎ	827	110.1	98.8	577	93.0	116.0	563	576	591
レタス類	1,496	79.1	75.7	289	141.1	146.9	284	314	266
きゅうり	1,441	83.6	87.6	453	123.9	128.3	509	425	425
なす	645	81.6	85.3	401	106.7	117.8	371	412	427
トマト	1,818	92.5	86.1	642	109.3	131.0	591	667	670
ピーマン	694	122.9	116.7	619	111.5	136.8	564	645	661
さといも	74	66.3	56.3	462	130.0	138.5	499	473	437
ばれいしょ	2,944	101.5	103.8	128	106.9	104.5	157	117	98
たまねぎ	4,918	97.8	105.7	122	114.4	120.0	136	122	109

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去5カ年平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心として、岐阜産や青森産の入荷があった。北海道産は太物が少なく、L、Mサイズが中心となったが、旬を追うごとに増え、月間では前年をかなり上回る入荷量となった。岐阜産は終盤に向かい旬を追うごとに減り、月間全体では前年をやや下回り、平年比を3割近く下回った。 品薄感と野菜全体の高値の影響もあり、価格は高値で推移した。月間では、高値だった前年をわずかに下回り、平年を大幅に上回った。
	にんじん	北海道産が中心の入荷であった。上中旬はMサイズが中心となり、入荷量は伸び悩んだが、下旬には生育の回復からLサイズ中心となり、月間では前年より微増となった。不足感から、業務筋を中心に需要のあった中国産も入荷があったが、引き合いは弱まり前年の3分の1程度の入荷量にとどまった。月間全体では前年並の入荷量であったが、平年比はやや下回った。 価格は品不足により単価高だった前年を4割ほど下回り、平年をかなりの程度下回った。

葉茎菜類	はくさい	長野産が中心の入荷であった。極端な気温高と干ばつの影響により生育が進まず、出荷量は減少した。全旬を通じて伸び悩み、月間でも前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 価格は野菜全体の高値傾向に加え、量販店での売場面積が徐々に拡大し、発注量が増えたことで上伸した。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。
	キャベツ類	群馬産を中心に主力の長野産の入荷があった。日照不足から肥大も玉伸びも悪く、小玉傾向で出荷量は伸び悩んだ。群馬産は旬を追うごとに微減傾向で、月間でも前年を下回った。長野産は中旬に激減して前年の半分程度となり、月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 野菜全体の高値傾向により量販店での特売の企画が多く、引き合いが強まったことにより価格は旬を追うごとに上伸を続け、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。
	ほうれんそう	岐阜産が中心の入荷であった。極端な気温高が続く中で生育不良となり、出荷量が少ない状況が続いた。全旬とも入荷量が少なく、月間では前年をかなり大きく下回り、平年を3割近く回った。 価格は絶対量不足から高値推移となり、中旬以降は高騰した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大幅に上回った。
	ねぎ（白ねぎ）	主力の長野産と北海道産を主体に鳥取産の入荷もあった。長野産と北海道産は生育が良く、潤沢な入荷が続いた。月間全体では前年を大幅に上回る入荷量となった。 9月に入っても気温が高く、真夏日になる日も多かったことから消費は鈍く、入荷量も多かったことで価格は伸び悩み、月間では前年を下回った。
	ねぎ（青ねぎ）	徳島産を中心として香川産や高知産などの入荷があった。極端な気温高が続き、生育不良が起きたことで出荷が不安定となり、全旬とも入荷量は伸び悩み、月間では前年を大幅に下回った。 価格は絶対量不足から高騰し、高値で推移し、月間では前年を大きく上回った。
	レタス類	玉レタスは長野産が中心となる入荷であった。極端な気温高による生育不良で出荷量が少ない状況が続いた。サニーレタス、リーフレタスともに長野産が中心となる入荷で、玉レタス同様に高温による生育不良で出荷量が少なく、入荷量も少なく不安定であった。レタス類全体では前年、平年とも大幅に下回った。 絶対量不足から価格は結球、非結球とも高値で推移し、レタス類全体では前年、平年とも大幅に上回った。
果菜類	きゅうり	福島産を中心に群馬産、大阪産、長野産などの入荷があった。西日本の産地は気温高の影響により生育不良となり、東日本の産地は降雨や日照不足で生育が不安定となり、各産地とも出荷量が少ない状況が続いた。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。 量販店の特売や給食需要があり、引き合いが強く単価高で推移した。月間では前年、平年とも大幅に上回った。
	なす	千両系は京都産と群馬産が主体となり、徳島産や高知産などの入荷もあった。長茄子は茨城産が主体となり、愛媛産の入荷があった。西日本の産地は、各産地とも気温高の影響により品質低下品も多く、出荷量が伸びず、前年をかなり下回り関東産地が主体となった。下旬には九州産が前倒しでの入荷となったが、月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。 野菜全体の高値の影響もあり、価格は高値で推移した。旬を追うごとに上伸傾向で、月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。

	トマト 	岐阜産が中心となり、岡山産や愛媛産などの入荷があった。各産地とも気温高で生育が悪く、品質低下品も多くなり、出荷量は伸び悩んだ。全旬を通じて入荷量は少なく、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 野菜全体の高値傾向の影響もあり、不足感から価格は旬を追うごとに上昇を続けた。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
	ピーマン 	茨城産が中心となり、主力の愛媛産や宮崎産の入荷もあったが、西日本の産地は、高温障害で着果不良となり、出荷量が少ない状況が続いた。学校給食などの需要が多く補充の必要があったことから、東北産地の青森産や岩手産などの入荷があった。月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。 引き合いが強かったことから価格は高値で推移し、旬を追うごとに上昇を続けた。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。
土物類	さといも 	愛媛産中心の入荷であった。月見需要や給食需要があり、上旬は単価高でのスタートの中でも引き合いがあり、入荷量は多く前年の倍以上となったが、量販店からの発注は少なく、中旬以降は伸びず、下旬は前年の半分程度にまで落ち込んだ。中国産の入荷もあり、業務筋を中心に月の前半には引き合いがあったため、月間では前年の2倍近い入荷量となった。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。 価格は、高値でスタートし、月の前半に引き合いが集中したことから旬を追うごとに下落傾向となるも、高値で推移した。月間では前年、平年とも大幅に上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は北海道産が中心の入荷であった。産地の出荷は順調であったが、残暑が厳しかったため消費が鈍く、引き合いが弱かったことから入荷量は伸び悩んだ。メークインも北海道産が中心の入荷で、丸芋同様に、気温高の影響で消費が鈍く入荷量は伸びなかった。ばれいしょ全体では、月間で前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 気温が高い日が続いたこともあり、消費は鈍く販売には苦戦した。出荷が順調なこともあり、旬を追うごとに価格は下落を続けた。下旬の価格は前年を大幅に下回ったが、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に兵庫産の入荷もあった。前年の北海道産の不作を受けて引き合いが強い状況が続いていた中、兵庫産が前進出荷となり、産地残量が少なくなったため、北海道産が本格出荷となるまでの月の前半は入荷量が少ない状況となった。下旬から北海道産の出荷が本格化し、全体の入荷量も回復傾向となった。不足感から業務筋を中心に需要があった中国産も引き続き入荷し、月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。 価格は、継続する高値の影響と野菜全体の高値傾向の影響により単価高での推移となったが、北海道産の本格出荷により、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（4）首都圏の需要を中心とした11月の見通し

10月初旬の時点では、秋冬野菜はおおむね平年並みで始まったものの、猛暑の影響を受けて、10月の生産は少なめとなっている。意図して定植を遅らせる産地もあるなど、状況は一様ではないものの、11月には平年並みに回復すると予想している。農業では昔から苗半作（苗の出来によって作柄の半分が決まるという意味）という言葉が伝わるが、この言葉を踏まえると、年内いっぱいは猛暑の影響を受けると見込まれる。購入苗でもばらつくとの報告もあり、名人級の農家がそろった現場でも作柄に困惑する場面が多いと予想される。寒暖の差が激しく、果菜類には難しい場面であり、11月下旬には一気に生育が進んで、採り遅れといった展開も想定される。物価高がメディアで喧伝されるが、青果物の高騰は全般的な出回り不足によるためである。

根菜類

だいこんは、千葉産（銚子）は、10月５日前後からの出荷開始となるが、例年より５～７日程度の遅れになっている。11月には増えて例年並みの出荷が予想され、生育そのものは順調である。千葉産（鎌ヶ谷）は、例年通り10月中旬から出荷が始まり、11月中旬をピークに下旬で切り上がると見込まれる。作付けは前年の90％と減っている。神奈川産は、現状は春物の播種（はしゅ）作業をしている。秋冬物は早い生産者が10月後半から出荷し始めるが、全員がそろうのは11月後半からとなり、作付けは前年並みである。台風による雨風はあったが、生育上の問題はなかった。青森産は、夏に続き９～10月と出荷は続いているが、暑さの影響で出荷は少なめとなっている。大幅に少なかった前年よりは多くの出荷が見込まれる。今後徐々に増え、10 ～ 11月がピークとなり、12月には減ると見通している。

にんじんは、北海道産は、例年に比べ10日早く10月中旬で終了する。作付けの減少が大きく影響したもので、収量は平年並みであった。千葉産は、例年並みに10月末頃から出荷が始まると予想される。夏の天候の影響があり、雨で流された圃場（ほじょう）も一部あった。また猛暑の熱風により若苗がとろけるなどの被害も報告された。播種のし直しで対応しており、一回目のピークは11月後半から12月上旬、その次は１月中旬頃を予想している。11月としては例年並みの出荷を予想している。品種は「ベータ441」である。青森産は、10月10日過ぎからの出荷となるが、生育順調で前年より７日程度早い。スタートからすぐにピークで11月15日頃までの出荷が予想される。品種は「紅福」で、M・Lサイズが中心となる。

葉茎菜類

キャベツは、千葉産が、10月５日過ぎから徐々に出荷が始まり、20日後から増え始めると予想している。気象の影響は特別なく、順調である。愛知産は10月10日前後から例年通り始まる見込みである。７月、８月の猛暑の影響により、定植は遅れ気味であり、10月出荷についてはやや少なめであるが、11月には増えて例年並みに追いついてくることが予想される。茨城産は、10月下旬から始まり11月がピークと予想しており、平年並みであるが、豊作傾向である。神奈川産は11月が出始めとなるが、現状は平年並みの生育である。前年は暖秋の影響により前進し多く出荷されたが、今年も前年並みに前進する可能性が予想される。

はくさいは、茨城産は10月下旬から例年通り始まるが、定植時期の天候不順から当初は少なめの出荷で推移し、11月に入り本格化し、順調に推移することが見込まれる。

ほうれんそうは、群馬産は10月10日頃から増えて来るが、夏の暑さでピークが遅れ、露地物と重なる11月上中旬に多くなると予想される。作付けは例年と同様である。栃木産は、日光高原の産地から始まる。本来であれば９月にいったん端境を迎え、10月に再び増えて来るパターンであるが、近年はそのようにならず、日照不足が影響し、さらに朝晩は寒く、細くて短く仕上がるようになっている。そのため10月以降もピークは無く、11月には早めには切り上がるという前年のようなパターンが見込ま

れる。岩手産は、９月の出荷は平年の70～80%と少なく、出荷は年明けまで続くが、10月以降はピークらしく増えることなく、平年を下回ると予想している。

ねぎは、千葉産は、猛暑の影響で必ずしも順調でないが、前年ほど悪くない。現状では、適度の降雨があり、さらに気温も下がって回復過程にある。昨年より１カ月早く、11月後半から12月には回復してくることが見込まれる。青森産は、10月はにんにくの植え付けに忙しいため、11月に入ってから本格的に増えてくる予想である。今年は猛暑や盆前後の降雨が多かった影響により、軟腐病（なんぷびょう）が蔓延している。そのため少なかった前年をさらに下回る出荷と予想され、さらに11月いっぱいの出荷は難しいと予想される。茨城産は、秋冬物は軟腐病により品質が悪く、10～11月はレタスに注力するため、少なめとなる予想である。前年も少なかったので、前年比では微減である。北海道産は、降雪や積雪がなければ11月いっぱい出荷できる。今年の作柄は平年作であった。

レタスは、茨城産は、前年７月から８月初めに播種した物は、暖秋でとう立ちが目立った。今年は８月５日頃から播種を開始した。そのためピークはやや後ろにずれて、10月15日過ぎから11月いっぱいとなり、11月としては前年を上回ることが見込まれる。兵庫産は、10月末頃から始まり、11月に入って出荷量がまとまってくることが見込まれる。ほぼ例年通りで、当面のピークは11月下旬を予想している。静岡産は、10月20日頃から始まり、12月上旬から本格的に増えてピークとなる見込みである。気象の影響は特別なく順調で、作付けも例年並みの出荷が予想される。

果菜類

きゅうりは、埼玉産は、抑制物の出荷が９月下旬から始まったが、例年より遅い。例年は10月にはピークとなるが、今年は天候の影響により遅れており、抑制物は11月がピークとなり12月中旬までと予想される。中心の越冬物は９月15日頃に定植し、10月13日頃から出荷が始まり、年明けの１月いっぱいとなり、10月下旬から11月がピークと予想される。高知産は、ほぼ例年並みに始まっており、気象の影響は特別なく、生育は順調である。現在までは少なめの出荷となっているが、定植を平年の時期より後ろにずらしている影響であり、当面のピークは11月下旬である。作付けは前年よりも２～３%減少している。

なすは、高知産は、平年並みに始まったが、天候による影響は極力抑えられており、単為結果性の品種となったことで、花落ちはある程度抑えられている。ピークは10月中旬から11月中旬と例年並みが見込まれ、作付けは前年並みである。岡山産は、出荷は始まっているが、例年より数日の遅れとなっており、気温高の影響により果実の品質はやや悪い。雨が少なく、虫の発生も多い。当面のピークとなる11月には回復してくることが見込まれる。福岡産は、９月６日から始まり、出荷量は問題ないが下級品が多くなっている。苗からの影響もあろうが、11月には回復してくることが見込まれる。11月初め頃に小さなピークが来て、年末までは横ばいで推移すると見込まれるが、10月に入り気温も下がり、回復を後押しすると予想される。作付けは若干の減少がある。

トマトは、群馬産は、気温が下がってきており、11月中旬まで出荷できると見込まれる。前年より作付けが増えて、前年を若干上回る出荷を予想している。当面日量4000ケースのペースを維持できる。千葉産は、抑制物は現状では例年の70%程度と少なく、今年は特に黄化葉巻病（おうかはまきびょう）（タバココナジラミによって媒介されるウイルス病）が目立っている。９月下旬にピークとなり、減少しながら推移し、11月いっぱいで早めに切り上がることが予想される。Mサイズ中心になると見込まれる。福岡産は養液栽培物が始まっている。９月定植の土耕物は10月に入ってからで、11月中旬から増えてくると予想される。当面11月がピークとなるが、高温で玉の仕上がり小さく、花落ちするなど少なめとなる予想である。青森産は、今年の出荷は10月いっぱいか、11月の第一週までとなることが見込まれる。選果場が統合したこともあり、前年より多く出ている。

ミニトマトは、熊本産は、９月21日から始まったが、ほぼ例年と変わらない。作型が分散

しているが、11月には出そろってくると予想される。購入苗がほとんどであるが、それでも苗にはばらつきがある。早期物は小玉果が多かったり、花質が悪かったりといった状況が見られた。供給に特別大きな影響は出ず、12月上旬には年内のピークを迎えると予想される。愛知産は、10月中旬までやや少なめを予想しているが、猛暑で花付きが悪かった。11月には例年並みのペースに戻ると予想される。品種は「小鈴クィーン」である。

ピーマンは、茨城産は、11月は秋ピーマンの中盤から終盤へ向かう時期である。温室物は10月下旬から始まるが、年内はまだまだ少ない。11月としては前年比ではやや少ないと予想する。岩手産は、露地物が終わりハウス物のみの出荷になっている。９月の出荷は前年を上回ったが、トータルでは減っており、夏の猛暑よりも春の干ばつが影響した。ハウス物は11月20日頃までは出荷量がまとまるが、その後は天候に左右されつつ減って来るものの、暖冬の場合はさらに延びると予想される。高知産は、９月18日から始まったが、現状は猛暑の影響で花落ちするなどやや少なめである。11月には平年並みに回復することが見込まれる。面積は前年並みである。

土物類

さといもは、愛媛産は「女早生（おんなわせ）」は現在出荷が始まっている。東京市場へは10月10日頃から本格化し、12月から年明け１月がピークになると予想される。今年は夜盗虫（よとうむし）が多発し、前年と同様に作柄は悪い。夏の暑さもあるが、植え付け時期の２～５月の多雨が響き、今シーズンは前年の80～90%と予想している。

ばれいしょは、北海道産（道東）は、玉数が多く、Lサイズ中心と大きさも例年並みとなっている。来年の４月まで、全体として前年を上回る出荷を予想している。品種はシストセンチュウ抵抗品種の「はるか」「きたかむい」などが市場出荷品種である。「ゆめいころ」も増えており、「ポロシリ」はポテトチップ用の品種で、収量が多いのが特長である。北海道産（道央）の「男爵」は11月まで収穫作業が続くが、今年は平年作を予想している。出荷のピークは10～11月で通常通りとなっており、玉の大きさもLサイズ中心と平年並みである。

たまねぎは、北海道産（道北）は、現在では収穫作業がほぼ終わったところであり、収量は平年作で少なかった前年の110%と予想している。10月から出荷のピークに入り、年明けて５月まで、玉のサイズはL大中心で、平年と変わらないと予想される。北海道産（道央）は、収穫は終わっている。数量的には平年を若干上回っており、12月まで多く、年明けは減ってくると見込まれる。年内の出荷は、少なかった前年の110%と予想している。

その他

ブロッコリーは、愛知産は、10月中下旬からの出荷となるが、ほぼ例年と変わらない。天候の影響もなく、作業は順調である。作付けはやや減少している。品種は例年と変わらず「ボルト」である。埼玉産は、秋のブロッコリーは例年と同様に10月１日売りから始まった。前年と同様か、さらに作柄は悪い。高温障害で病気が出て下等級品が多くなった。箱数はそれ程減っていない。10月過ぎには回復してきて、11月には例年並みに品質が回復した物が出荷されると見込まれる。

カリフラワーは、新潟産が始まっており、10月中旬ピークに11月いっぱいの計画である。高温と長雨の影響により平年の60～70%作と少ないが、かなり少なかった前年を上回り、11月は回復の可能性が残されていると予想される。

かぼちゃは、北海道産は、11月も出荷は続くが10月のピーク時に比べると減ってきて、12月16日販売で切り上がることが見込まれる。全体として遅く出荷する作型が増えて、11月も前年を上回る出荷と予想される。

ごぼうは、青森産は始まっており、ピークは10月末頃となる見込みである。11月については積雪まで掘り取りして出荷を行う。作付面積

は減っている。

かぶは、千葉産は周年産地であるが、現状は稲刈りに注力して少ない。11月に入ると増えながら推移し、下旬から12月がピークと予想している。

れんこんは、茨城産は、８月から４月に植えた露地物が始まってきたが、花が咲くのが早く生育が進み、一部に傷みが出始めた。これまでの出荷実績は前年の90％となっており、年末まで少なめで推移すると予想している。

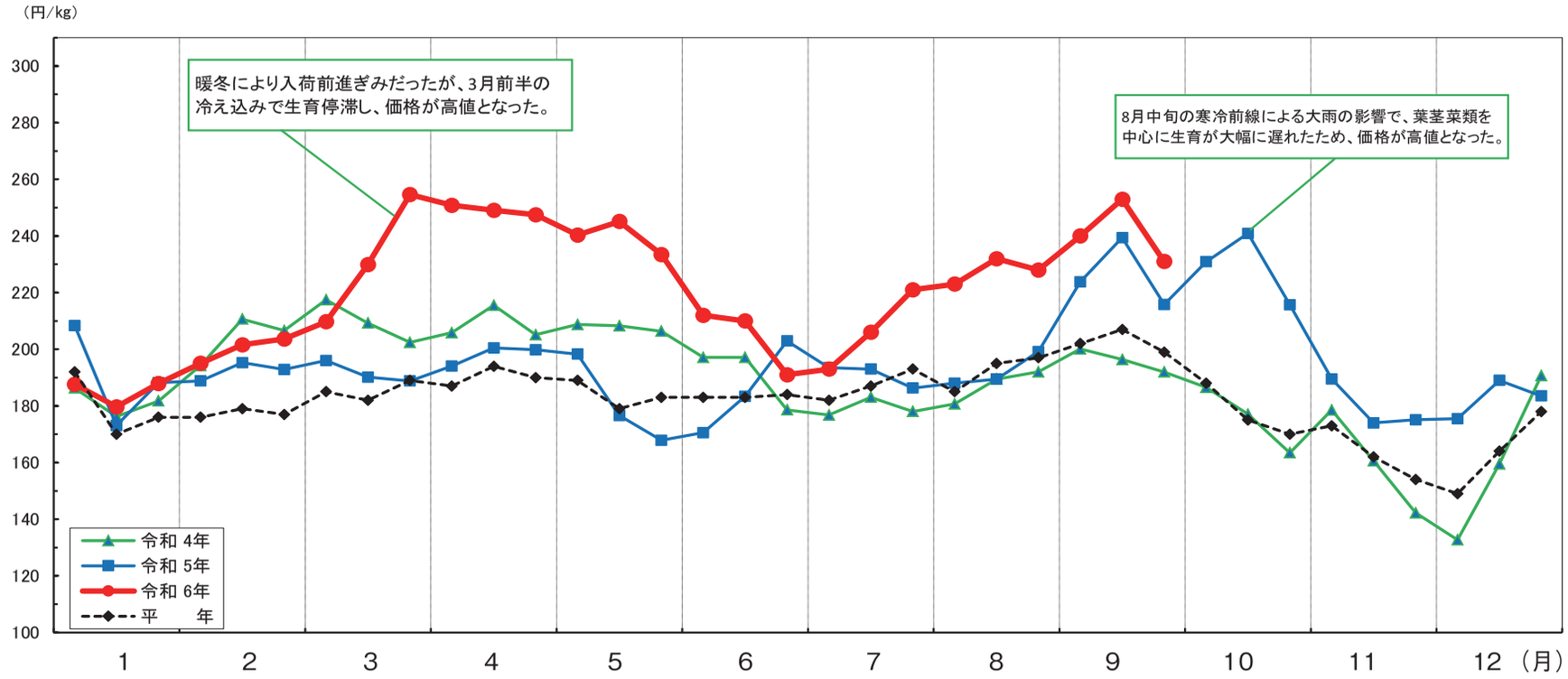
かんしょは、徳島産は現在までのところ平年作であり、前年比でも100％かやや多いと予想している。12月中旬の最大のピークに向けて、10月中旬以降は徐々に増えながら推移すると見込まれ、Lサイズ中心である。千葉産は、現在は収穫作業のピークに入っているが、出荷物は「シルクスイート」と早掘りの「ベニアズマ」である。「べにはるか」は11月の末頃から出荷を始める。ベニアズマの中心サイズはL・2L、シルクスイートはL・M中心でやや小ぶりである。茨城産は、収穫作業は順調に進んでいるが、平年作を予想している。「紅優果（べにはるか）」は２月までの計画である。

いちごは、栃木産は「とちあいか」となるが、例年と同様に10月中旬頃からの出荷が始まると予想される。この品種は冷蔵処理のいらない早生品種であるが、期時をそろえるために冷蔵処理するケースがほとんどである。例年通り12月前半に一度ピークが来ると予想している。福岡産の「あまおう」は例年より遅く11月13・14日からと、例年より７日程度の遅れで出荷となっている。これは夏の猛暑で株冷（低温暗黒処理）・夜冷（夜間に比較的低温で管理）とも、冷蔵処理を遅らせた影響であり、当面のピークは12月上旬である。佐賀産は、「いちごさん」の出荷となるが、夏の猛暑により花落ちや花芽の付きが遅く前年より遅い始まりとなる見込みである。出荷の始まりは12月に入ってからとなることが予想される。熊本産は早生の「ゆうべに」（熊本県の奨励品種）・晩生の「恋みのり」（久留米の試験場育成生品種）の２品種の出荷となる。気温高から花芽が動かず、定植は10日程遅れ、11月25日頃の出荷開始が予想される。一回目のピークは12月下旬に来るため、クリスマスの時期に小玉をそろえるのは難しいシーズンになると予想している。

ナバナは、千葉産は、例年と同じ10月20日前後から出荷が開始し、11月は前年並みを予想している。生育は順調で、12月にはまとまってくると予想している。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

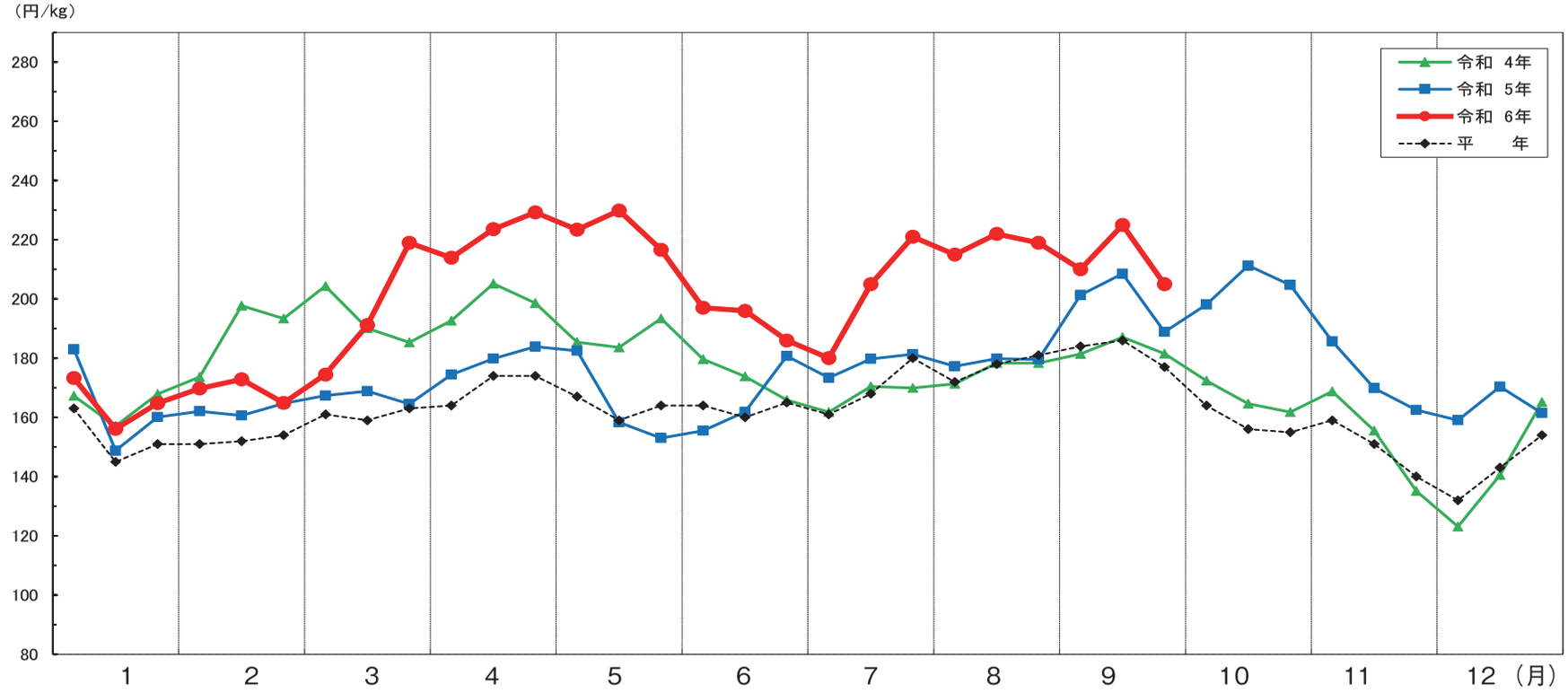


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和４年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和５年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和６年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231									
平　　年	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和元年～令和５年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／ kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和４年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和５年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和６年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205									
平　　年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和元年～令和５年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。